

右筆

YUHITU
YUKO IZUMITA
ANTHOLOGY

はじめに

ごあいさつ

この作品集『右筆』は、平成24年11月に新潟県立近代美術館において開催の墨遊小路書展を機に作成致しました。この時の展覧会は文化活動で人々の心を豊かにしたい、そのお役立ちがしたいと願う、ひとりの若者の信念により心動かされた多くの人々のご協力により開催されました。

「書」に人生をかけて自己の想いを表現しようと誠心誠意取り組んでおります書家・泉田佑子の世界をご紹介します。この『右筆』のページをめくる毎に、それぞれの作品に込められた様々な人々との想いや、社会の中で懸命に生きようと努力する人々の関わりの様子がご覧いただける事と思います。

ここ最近、自然災害が相次ぎ更には昨年の大震災発生と、人との関係・家族とのつながり・社会との絆、今ほど重要性について考えさせられることはありません。しかし、それは逆に、文明の発達に伴いややもすると希薄になってしまった人間関係に、まるで警告する様にも感じられます。人は、ひとりでは生きられません。また、ひとりでこの世に生きているわけではありません。遠い先祖があり、そして家族があり、地域があり又地域を超えて多くの人々との関わりの中で、善意に支えられ励まされ、それをお互いに感じ合い、与えられ与え、時には慰めもあり叱咤もあり、それらの全てを含んで人生を日々送る事が出来るのではないのでしょうか。

しかしながら、楽には生きてはゆけないこの世の中です。だからこそ、優しくホッとする心の休日が必要ではないのでしょうか。ゆったりとした時間の中で、この『右筆』は良き友として、優しくまた力強く何かを語りかけてくれることでしょう。

これからも、書家・泉田佑子の世界を、ひとりでも多くの方々に知っていただき、作品を通して多くの皆様に、生きる力と希望を与え続けることを期待しています。

最後にこの『右筆』発刊にあたりご協力下さいました多くの皆様、大切な作品を快くお貸し下さった皆様、そして多方面からのお力添えを賜りました全ての皆様に、墨遊小路書展実行委員長として、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

畑田東榮



書 一本道
1350×340mm
書いて書いて書き続ける私の一本道

右筆

「墨遊小路」^{ぼくゆうこうじ}とは、私のアトリエから世界中へ続く架空の小路です。

これまでいくつかの町を訪ね、たくさんの皆さまと出会い、その町の匂いが包み込む温かさや懐かしさに触れてきました。ことやもの、想いをつなぐ道「小路」や「路地」には、その町にくらす人々の息づかいや味わいがあるように思います。

そうした「道」に憧れて名付けた「墨遊小路」には、これまで私が書を通して出会ったたくさんの皆さまが暮らしてくださっています。ひとりの想いが道となり、やがて人々の心のつながりがそれぞれの道をつないで、ちょっと不思議な「路地」や「横丁」が出来ました。また作品集のタイトル^{ゆうひつ}の「右筆」とは、昔、筆を取って貴人の為に文を書くことを職にした人の役職名です。私の書は、皆さまとの心の交流から生まれるので「右筆」としました。この作品集では、「墨遊小路」の路地や横丁にくらす皆さまとのエピソードや「墨遊小路」での奇譚な日々を綴ったエッセイを、書と共にご紹介させて頂きたいと思います。

架空の小路ですが、四季もあり、人々が行き交い、何より温かい心のつながりが生きています。まずは小路の入口にあたります、私のアトリエ^{みでびとしや}「筆人舎」から順にご紹介していきましょう。その後、「職人横丁」「おもてなし横丁」「旅籠」「芝居小屋」「ハイカラ横丁」「うまいもん横丁」「人情横丁」「勘定方」と続いて行きます。どの路地や横丁にも个性的で楽しい住人が暮らしており、きっと皆さまを温かく迎えてくれることでしょう。

それでは皆さま、どうぞ「墨遊小路」へお出掛けください。





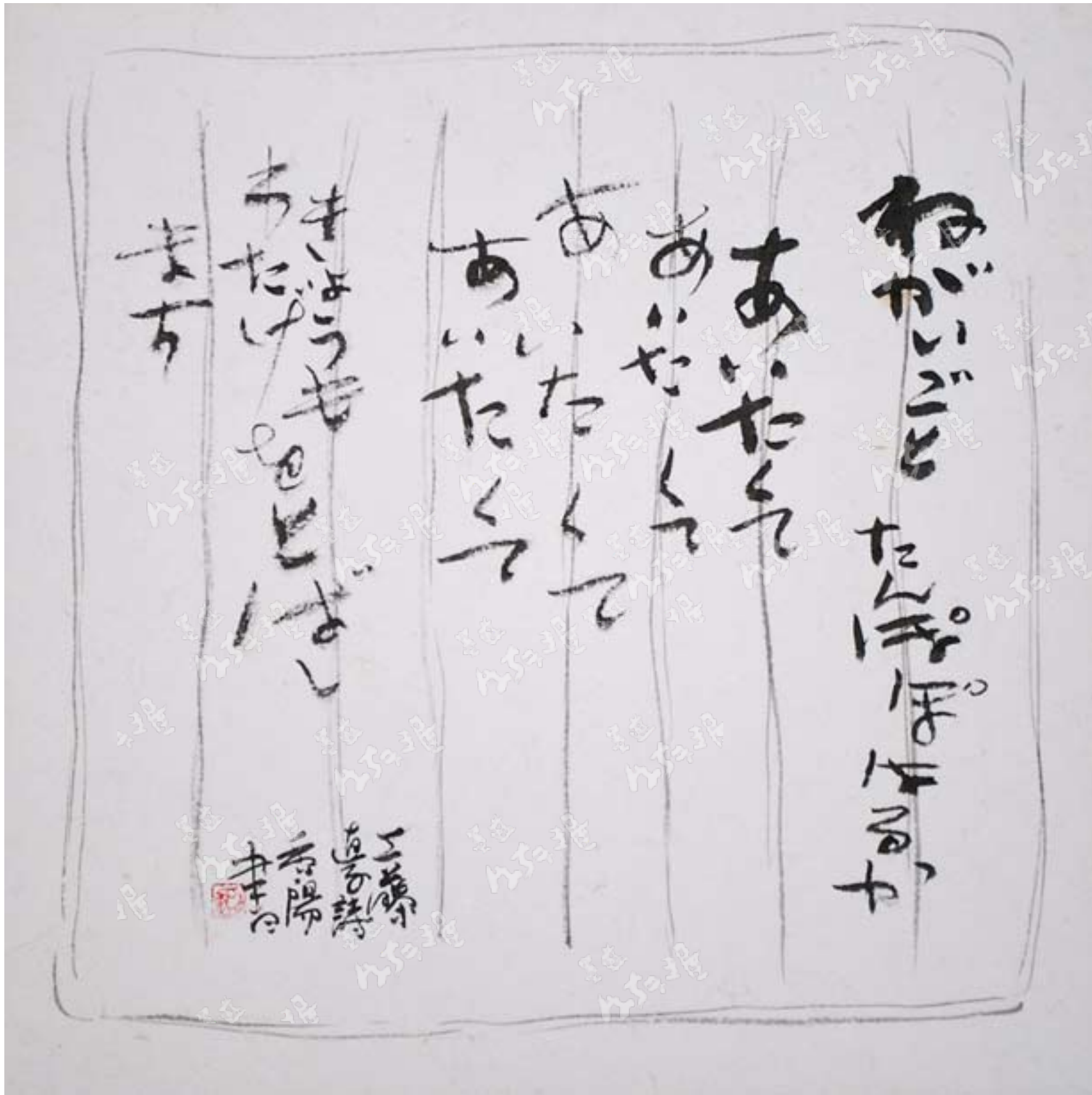
「はじめまして、はちまき屋の泉田佑子と申します。」と自己紹介すると、きまって「おめさんあの頭に巻く鉢巻き売ってるんかね。」と言われつつ、12年が過ぎようとしています。私が初めて筆を持ったのは5歳の頃でした。祖母に墨の磨り方から、筆の持ち方、姿勢、文鎮の置き方まで細かく躰けられ、習字教室に行く前の日には、必ず家で練習してから出掛けるという熱の入れようでした。しかし、習字というのは窮屈なものだと、子どもながらに思いつつも、少し大人になったような気もしたものです。他の遊びとは違い、なにしろ必要以上に道具を丁寧によく扱うことや、紙を無駄にしないといけないと、緊張しながら筆を運ぶもろもろの所作などが、そう思わせたのかも知れませんが、私にとっては何か特別な大人の時間でした。

しかし大学に入ると、この習字とは全く次元の異なる世界が広がっていました。50畳の日本間に敷き詰められた毛氈の上に、巨大な紙を敷き、バケツになみなみと入れた墨と大きな筆で、先輩方が書と格闘していました。今ではテレビなどで、よく見かけられるようになりましたが、私は初めてその光景を目の当たりにし、返り血ならね、返り墨を浴びたあの瞬間は忘れられま

せん。また、学問としての書の歴史や文化に触れ、自己表現としての書のあり方を知り衝撃を覚えました。昔から「書は人なり」という言葉があるように、書にはただ美しく整った字を書く為の技術を磨くことだけでは言い尽くせない、数多くの魅力が潜んでいたのです。大学で学んだことはこうした専門の話でしたが、社会に出てから私に最も足りなかったものは、人との関わりでした。

そうして社会に出た私は、何か、社会の中でひとりぽつんと切り離された存在のように感じました。

また、経験が足りなかったせいもあり仕事を頼んでももらえることもありません。社会的な信用がないため、携帯電話やカードの契約も出来ません。こうして、遅ればせながら社会勉強がはじまったのです。そんな暮らしを支えてくださったのは、まわりの皆さんの温かい想いでした。「想い」は相手をおもいやることから、関係が始まります。そして、それが相互に行き交うことで関係がゆつくりと築かれて行くのです。簡単なことのように、気が付くのにも、続けようとするのも難しい、永遠のテーマをようやく発見したのです。



あいたくて
400×400mm

ねがごと たんぽはるか あいたくて あいたくて あいたくて
あいたくて きょうも わたげを とばします

皆さまから「どうして書家になろうと思ったのですか?」とよく質問されますが書家になろうと決めたある出来事がありました。それは何日もの間、昼も夜も一心不乱に書きまくり、あまりの疲労の末、前後不覚に落ち入りながら仕上げた一枚の書作品を見た友が、涙を流して感動してくれたことでした。「ゆうこちゃん。これ私の為に書いてくれたんでしょう? 本当に嬉しい。お蔭で元気が出たよ。ありがとう。「えっ、そんなつもりではなかったけれど、あなたが喜んでくれるなら、いくらでも書くよ。」などとその場は取り繕いましたが、なんだか心がふわっと温かく不思議な気持ちになりました。これまで私の書の前で話されていたことは、たいてい字形のこと、技術のこと、構図のこと、またどんな古典をベースにしているのかというような、書表現の世界の話ばかりでした。ですから「ありがとう。感動した。」という感想は、初めて聞くことばでした。「私の書は、もしかして彼女の役に立ったのかしら。もしかすると書は人の心の応援になるのかもしれない。」と思ったらとても嬉しくなりました。当時、環境問題が大きな社会問題になりつつあるころ、私は書くという行為が私のちいさなレベルでしかなくても大量のゴミを生産し続けているという事実や、こんなことをしても将来書家として大成できるとは思えないという大きな不安や悩み、私には才能がないに違いないという自己否定。または、それを認めたくないプライド。そんな複雑な思いが交錯する中にいました。

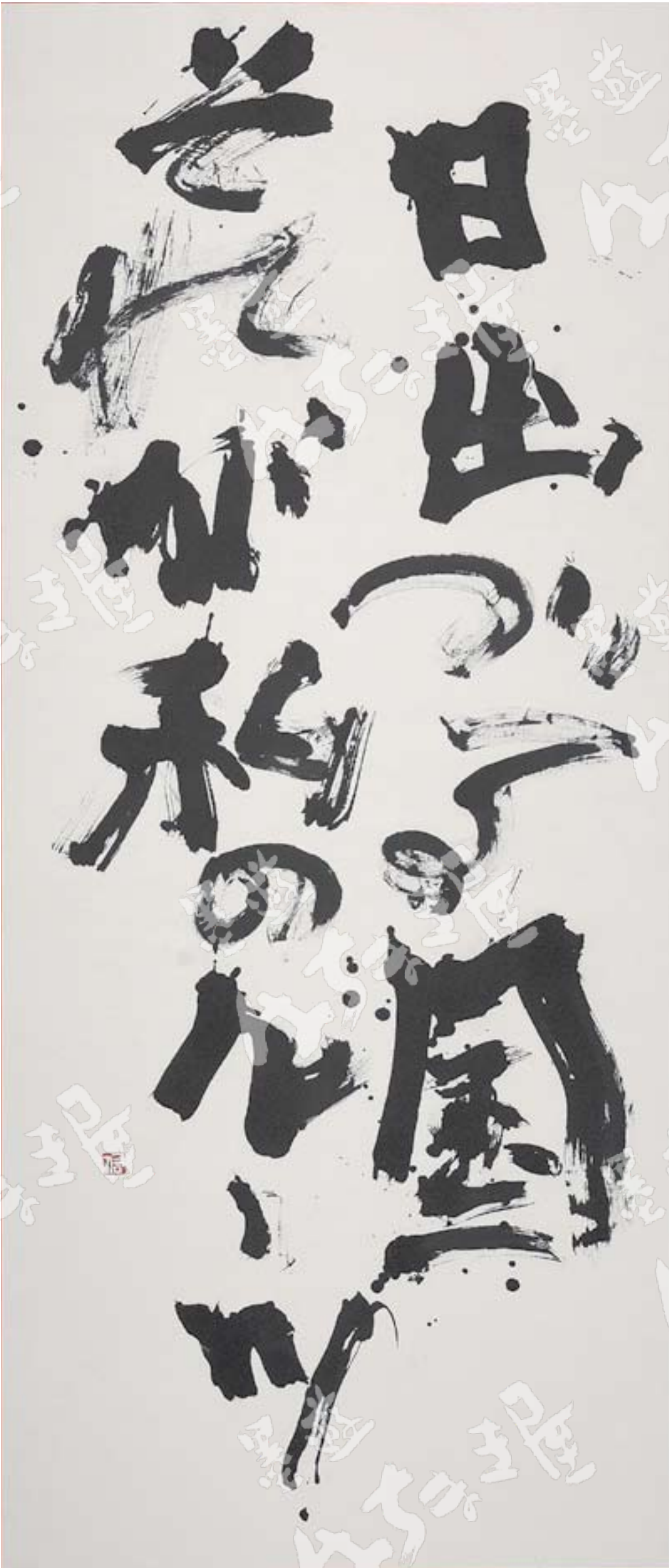
私は、そんな迷いの中、その友の涙をひとつの理由に、書家になるという、身の程知らずのおおきな舵を随分と強引にきったのでした。まわりの全ての大人達は、どうやって食べて行くんだと大反対でしたし、ましてや書の師匠でさえもまずは生活の基盤が大事だから書家の道は進まない方が良くと、

説得するのに必死でした。そんなこともあり、「いざ、墨遊び、はちまき締めて、いっちょやってやらあ。」と担荷をきったので「墨遊はちまき屋」という少々生意気くさい屋号になってしまいました。その後、作品を発表する中で、私の作品の前に立ち止まって、知らない人々が感激の涙を流してくれたことは、私を多いに励まし、勇気づけてはくれましたが、やはり生きて行く為の糧を得るには、大変の苦労が待っていました。

たくさんの挫折のあと、やはり、私には書くということしか出来ない。どうにかして、書で社会のお役に立たせてもらえる方法を考えよう、と地道に歩むしかない書家の道を覚悟すること、ようやく私は書の役割を知ることができました。

歴史を顧みればどの時代も、文化が人々の為に出来ることは、ただひとつ。人々の心の糧となり、心を励ますことだけです。書は、文化の中でも文字を扱う芸ですから、他に何か出来るとすれば、人の想いや歴史などを記録し他の誰かに伝えるということが出来るかも知れません。そう考えると、世間的には本当にちいさなことでしょうが、ひとりひとりの心のひだに触れながらそれらを書で表現していくということが、私の使命だと感じるようになりました。幸せな人たちもいれば、悲しみの中にいる人たちもまた大勢います。私は、書で人々の心の応援をさせて頂きたいと思っています。

私が書くのは、私と同じ時代を精一杯生きている人々の、心模様、生き様、信念、歴史、願い、祈り、想い。リアルな今の記録です。私達が出会い、共に生きた証を、ひとつひとつ大切に書にしたため、未来へ伝える為に、そして人々の心の糧になる為に書き続けたいと思います。だから、あいたくて。一人でも多くみなさんにあいたくて。



日出づる国
1730×730mm

日出づる国 それが私のルーツ

かの有名な親書「日出づる処の天子、日没する処の天子に書を致す恙なきや云々」で知られる、聖徳太子さまは私のヒーローです。

また「^{かんのわのなのこくおういん}漢委奴国王印の金印」「邪馬台国」「金印」「聖徳太子」この3つが、小学生の頃私を最も歴史に夢中にさせてくれたキーワードでした。

小学校6年生の担任の先生は、少々個性的な先生で、私たちに1週間かけて倭の国、「邪馬台国^{やまたいこく}の場所を解明せよ!との宿題を出されました。「魏志倭人伝^{ぎしわじんでん}」という歴史書に書かれた数値を手がかりに、何千里などという聞いたことのない単位をメートルに直して、地図の上を自由に航海するという手法で、探し出します。まだ、はっきりとわかってはいない、卑弥呼の遺跡のありかをみごと言い当てたなら、将来、Bigプレゼントがもらえるという取り決めのゲームは、クラス中を古代ロマンの謎に駆り立てました。私はとても難しそうに見える漢文の読み下し文に一瞬クラッとしましたが、毎日にらめっこしつつ、コンパスを使って航海の道筋を何回とたどっては、終点が海の中になってしまったこと数十回、なかなか上手い具合に「邪馬台国」は見つからなかったのです。計算が悪いのか、やはり漢文の意味がわからないのが一番のネックだったのか、宿題のリ

ミットがせまり、とうとう奥の手に出ることにしました。ほら、テストでどうしてもわからない時などに使う、あの禁じ手です。鉛筆を矢に見立てて、「えい!」と地図に投げてささったところは、さて、どこだったのか…今では、もう思い出せません。

そんな話をしたところ、奈良ご出身の料理の先生が、「実家の近くに聖徳太子はんの矢が落ちたところがあるんですわ。はじめ住む場所をお決めにならるのに弓を引いて、その矢の落ちたところにしようと、引きはったら、ボトンとすぐそこに落ちてしまわれたんですわ。それじゃあかんというので、そこから、もう一度引き直したところが今の法隆寺ですわ。1回目でやめとけば、私の家の近くが法隆寺になるところやったんやけどね。それにしてもそんなテキトーで、いいのかと思いまへん?…」と面白おかしく話してくださいました。

な～んだ、聖徳太子さまも、奥の手ですね。と私は違った意味で、面白く思えました。それで、「ルーツは?」と聞かれれば「日出づる国」。世界中ではいつもどこかで日は昇っているのですが、そんな太陽の壮大なドラマが私の雅号「香陽^{こうよう}」の由来です。太陽のようにいつも明るく皆さまの側で香り続けたいと願っています。



今年は4年に一度の平和の祭典、オリンピックイヤーでした。オリンピックで象徴的な役割を果たす聖火は、今も伝統的な方法で太陽から採火するそうで、本番は非公開ということですから、とても神秘的な話です。

先日、アトリエの隣に住む、ひなちゃん(6歳)が、突然遊びに来て、筆で「くまさん」を書いて帰って行きました。この可能性を秘めたかわいい来客も、なかなか楽しくて神秘的です。ひなちゃんのお父さんは、『のど自慢』に出場して合格の鐘をならす程の歌の名人です。その応援をテレビでしようと、親戚一同が集まっているところにこのこと出掛けて行き、私も一緒に手に汗を握って応援した頃から、お隣の家族と仲良しになりました。

お隣の家のご主人は、ひなちゃんのおじいさんです。背が高く引き締まった体系、たいてい口元をキリリと結んでいらっしゃるので、一見ちょっと怖そうなのです。

私のアトリエに珍しく数人の来客があり、クラウンに乗ってお帰りになられるのを見送ったところに、丁度、隣のご主人が家から出て来られました。私に会うなり、指ではおに線を引くまねをしながら、「あの筋の人たちか?」と聞くので、私は思わず吹

き出していました。「おじさんの方が、ずっと怖いんですけど。」そしたら、「男は、やたらめったらニヤニヤしてちゃいかん。軽く見られる。特に初対面の時は尚更だ。」だ、そうです。「ところで、仕事は順調か?」と私に聞くので、「今にも飢え死にしそうです。」と冗談まじりに答えると、家の中の奥さんに大声で「となりの先生が飢え死にしそうだって言うから、ほら、握り飯でも差し入れしてやれ!」と、これまたすごい展開になりました。

「それにしても、その位が丁度いい。技術を売る商売なんだから、若い頃は何としても我慢が第一。昔から苦労は買ってでもしろ、という言葉があるから、あと20年くらい苦労を買い続ければ必ず何かが戻ってくる。オレちょっと立派なこと言ってるな。」などと言いながら、戻って行かれました。恐るべしお隣さん。

雪の日には、ちゃんと私の玄関の前まで、雪かきしてくださるおじさん、いつもありがとうございます。楽しいお隣さんのおかげで、私はいつも平和で人情あふれる不思議な日々を過ごしています。



ひとりの祈り
700×1300mm
ひとりの祈りが心をつないでゆく

私が小学生の頃、初めて自分で選んで母から買ってもらった筆は、胡麻竹の節のある筆管に馬の毛が挿げ込まれた、とても洒落たものでした。少し字がうまく書けるようになり、展覧会などで賞をもらった褒美であったような気がしますが、クラスでは誰も持っていない特別な筆を手にして得意になった覚えがあります。子どもの使う筆にしては、やや高級なものであったらしく、お蔭で今も現役です。25年も使えば、そろそろ、もとは取ったかな。いえいえ、筆は私たちよりずっと長生きです。書の道具は全てそうですが、筆も自然の恵みを受けて人が作り上げたもので、筆管にも穂先も私達と同じ命が宿っており、共鳴できる道具であり生き物であると私は思っています。その筆の銘には『無心一如』と彫られています。禅の教えのようですが、私にはなんとも難しいことです。

筆という道具は、もともとは竹の先を割ったもの、またはその先に動物の毛を用いて作られたものです。現在最古の出土品は、紀元前2世紀頃の中国の楚の国の遺跡から見つっています。日本で現存する最古の筆は、正倉院御物の「天平筆」で、兎毫・鹿毫・狸毫を用いてあり、最近の筆とは製法も違って毛の芯を紙で巻いて仕立てたものです。新潟県では、残念なことに筆を作ってくれる職人が姿を消してしまいました。そんなことで、最近では滋賀県の攀桂堂さんの「15代目筆師・藤野雲平先生」にお願いしてオリジナルの筆を作ってもらっています。雲平先生は古来からの製法を受け継ぎ、今でも紙巻き筆をつくっていらっしゃる筆師です。その雲平先生が、私の為に作ってくださった筆には『知音』という銘が彫ってありました。「以前アトリエへお伺いした時、筆掛に掛かっていた筆を拝見しておりましたので、すこし柔らかめで穂先の長い筆を眺えさせて頂きました。」とお便りにありました。『知音』とは言葉で語らずとも、心と心が響きあう友達という意味です。私はこの筆からいつも勇気を頂いています。





好き
1200×1200mm

すきになる ということは
心を ちぎってあげるのか
だからこんなに痛いのか 〈工藤直子詩より〉

2002年、私は初めての個展の準備をしている時に、工藤直子さんの詩に出会いました。いちばんはじめに私の心を奪った詩は「ねがいごと たんぽぽはるか あいたくて あいたくて あいたくて あいたくて 今日も綿毛を飛ばします。」でした。これは『のはらうた』という詩集の中のひとつで、擬人化された「たんぽぽ」が願い事というタイトルの詩を書いて歌うという設定です。他にも野原にいる植物や動物、虫、時には自然の現象などが作者になって、自分の詩を奏でたりします。今まで、難解な詩こそ詩というものだと思っていた私の妄想を打ち破り、こんなにも簡単なのに心に響いてくる詩は、なんて素晴らしいのだろーうと思いました。何もかしこまらずとも、自然に目の前にイメージが広がり、いつの間にか覚えてしまうような詩が私の目標となりました、そして私もそんな風に暮らしの中で人の

心に寄り添っていく書を書きたいと思ったのです。

好きという文字は、女性が子どもを抱く姿から出来ています。はじめてご覧になられる方は「どこが?」とやはり思うでしょうか?もし、ご自分がはじめて文字を作ることになった、という気持ちになって、お母さんが子どもを抱っこしている様子を想像してみてください。そんな幸せな様子を眺めながら、「好き」という意味を考えると、文字が自然に出来上がります。私は、こうした象形文字を中心とした文字が好きです。そこには、人々が様々な現象をどのように感じて文字が出来たのかという不思議や、どうしても文字にしたいと苦心して記号化する様子が感じられるからです。まだ今程、文字のルールが完璧ではなかった時代には偏と旁が逆になっていたり、ひとつ余計に文字がくっついていたりと自由なところがたくさんあり、私も参加し甲斐があるところも魅力的です。ですからたまにちょっと調子にのって、古代人になったつもりで文字をつくってみたりします。「たんぽぽ」や、「ちょうちょ」と漢字にはない、新しい文字をつくるのも、なかなかユーモアがあって楽しいことです。

「右筆」 全60頁

書家 泉田佑子の2000年～2012年までの歩みと
作品に込められた思いが綴られています。

最後まで読みたいと思われた方は、
公式販売サイトより、
電子版をお求めください。

